微笑

夢野久作

それは可愛らしい、お河童（かっぱ）さんの人形であった。丸裸体（まるはだか）のまま……どこをみつめているかわからないまま……ニッコリと笑っていた。

……時間と空間とを無視した……すべての空虚を代表した微笑であった。

……真実無上の美くしさ……私は、その美くしさが羨ましくなった。云い知れず憎々しくなった。そのスベスベした肌の光りが無性に悲しく、腹立たしく、自烈度（じれった）くなった。

その人形を壊してしまいたくなった。その微笑をメチャメチャにしたくなった。私は人形を抱き上げて、

静かに首をねじって見た。するとその首は、殆んど音も立てないで、ポックリと折れた中から、竹の咽喉笛(のどぶえ)がヒョイと出て来た……人を馬鹿にしたように……。

私は面白くなった。

拳固(げんこ)を固めてポカリと頭をたたき割ったら、鋸屑(おがくず)の脳味噌がバラバラと崩れ落ちて来た。胴を摑み破ると、ボール紙の肋骨(ろっこつ)が飛び出した。その下から又、薄板の隔膜と反故紙(ほごがみ)の腸があらわれた。手足をポキポキとヘシ折ったら、中味は灰色の土の肉ばかりで、骨の処(とこ)は空虚(うつろ)になっていることがわかった。

けれども人形は死ななかった。何もかもバラバラに

なったまま、可愛らしくニコニコしていた。
私はいよいよ苛立（いらだ）たしくなった。人形の破片（かけら）を残らず古新聞に包んで、グルグルと押し丸めて、庭の隅のハキダメにタタキ込んだ。……こんな下らないものを作った人形師を咀（のろ）いながら…………。

　その古新聞紙はハキダメの中で雨にたたかれて破れた。メチャメチャになった人形の手足が、ゴミクタの中に散らばった。その中から可愛らしい硝子（ガラス）の片眼だけが、高い高い青空を見詰めながら、いつまでもいつまでも微笑していた。私はずっと後になってそれを発見した。そうして何かしらドキンとさせられた。

私は履物の踵（かかと）で、その片眼を踏みつけた。全身の重みをかけてキリキリと廻転した。

白い太陽がキラキラと笑った。

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房
1992（平成4）年8月24日第1刷発行
底本の親本：「日本探偵小説全集　第十一篇　夢野久作集」改造社
1929（昭和4）年12月3日発行
入力：柴田卓治
校正：しず
2000年5月19日公開
2003年10月24日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。